今すぐ透かしを削除する

◆南海日日新聞社に、令和２年１０月２８日(水)に尾鷲市で行われました、
エネルギー施設視察会の記事が掲載されました。

南海日日　2020年(令2)10月30日

54年の歴史振り返る

都市環境ゼミ　尾鷲火力解体視察

三重大学と県内財界の代表らでつくる「都市環境ゼミナール」＝会長・伊藤達雄三重大学名誉教授（87）＝は28日、10月例会で尾鷲市を訪れ、施設解体が進む中部電力尾鷲三田工事所（桑原直弘所長）を視察した。

恒例の現地学習会で「54年の歴史に幕を下ろした旧尾鷲三田火力発電所」をテーマにエネルギー施設視察会を企画。伊藤会長ら会員30人が参加し、尾鷲三田工事所の上野昭也業務課長らが案内した。

伊藤会長は「旧尾鷲三田火力発電所は1964（昭和39）年に尾鷲火力発電所として営業を開始し、2018年12月の廃止まで54年間にわたり地元市民に親しまれてきた。86年の3号機建設に合わせ設置された尾鷲市のシンボル『集合型煙突』が役目を終えて年内に解体される。エネルギー施設発展の一翼を担った尾鷲火力解体の現場を見て当時の生活や文化に触れる有意義な機会に」と呼び掛けた。

参加者らは上野課長から尾鷲火力の歴史や設備撤去工事の工程、煙突撤去の小割解体からクレーンによるつり下ろし作業の概要について説明を受け、構内視察に出向いた。

煙突の解体現場では「8月に煙突集煙部（最上部）の小割解体に着手し、現在は230㍍のうち100㍍を切り離した状況。年内には残り130㍍の解体を終える。発電施設は作業員約100人が発電設備の撤去工事に携わり、工事の進捗（しんちょく）率は9月末で75％」などと説明を受けた。

煙突解体工事では大型クレーンで長さ7㍍の筒部分をつり下ろす作業も見学し、約1時間半の視察を終えた。

伊藤会長はかつて尾鷲火力3・4号機増設計画の推進委員長を務めた。大気汚染問題で市民が不安に思っていた当時の様子を振り返り、「時代の変遷と科学技術の進歩に驚き、一時代の終焉（しゅうえん）を迎える光景を見せてもらった。当時の大規模プロジェクトを振り返ると、尾鷲火力が終わりを告げるとは想像できなかった」。

「今後は尾鷲市の港湾機能と風光明媚（めいび）な自然環境を現在の地域社会にどのように生かすかが課題になるが、おわせSEAモデル協議会の進捗が滞っていると聞いている。火力跡地活用をまちづくりに発展させ、市民にどのような幸せをもたらすのか、今後の行く末を見守りたい」。

同ゼミは（昭和47）年重大が開催し求める参加者の公開講座後け翌73年1月ミとして発足毎月の例会で や現地視察、ポジウムなどている。

尾鷲火力の煙突解体工事を視察する都市環境ゼミナールの会員たち（28日）